

日本學報 別刷本

第72輯・pp.41~58

認知言語学的観点による日本語の連体修飾研究

—連体修飾節・ノを用いた連体修飾を中心に—

森山新

moriyama.shin@ocha.ac.jp



韓國日本學會

2007. 8

<http://kaja.or.kr>

認知言語学的観点による日本語の連体修飾研究

－連体修飾節・ノを用いた連体修飾を中心に－

森山新*
moriyama.shin@ocha.ac.jp

＜要 旨＞

本稿は日英の連体修飾構造を対照しながら、認知言語学的な観点を用い、日本語の連体修飾構造の特徴を明らかにしたものである。連体修飾節を用いた連体修飾にしても、of / ノを用いた連体修飾にしても、英語の場合には、空間的、論理的、文法的な意味での本質的關係 (intrinsic relationship) が求められるのに対し、日本語の場合にはそのような用法のほかにも、その場のコンテキストに支えられた語用論的推論に依存した用法も発達していることが明らかになった。

ここで明らかになった知見は日本語教育における連体修飾の指導に生かしていくことができる。具体的には、英語などにはあまり見られない、語用論的推論による連体修飾節やノの連体修飾用法の習得が困難であると予想されることから、それらが重点的に教えられることになる。例をあげれば、①連体修飾節では、英語であれば関係節で表される「補足語修飾節」やthat節や関係副詞節で表される「内容節」だけでなく、「語用論的推論による連体修飾節」や「相対名詞修飾節」も日本語では連体修飾節になりうることを具体例とともに教える。②ノの用法でも所有、所属、包含、格関係、同格といった本質的な関係だけでなく、語用論的推論に基づく連体修飾用法があることを示すことが有効であろう。

また、原材料や手段・媒体、時や場所、様態、特徴・属性などのより親密な関係でも、ノをつけて連体修飾語を作ることができることも示す必要がある。

主題語：認知言語学、連体修飾節、ノ、of、語用論的推論

1. はじめに

今世紀に入り、認知言語学は応用認知言語学を唱え、言語習得や言語教育に対し示唆に富んだ様々な提案をしはじめている。それは英語習得・教育を皮切りに始められたが、今日では日本語習得・教育の分野にも及んでいる (森山2007)。

寺村 (1975-1978) によれば、日本語の連体修飾節構造は、修飾語と被修飾節との間に格関係が成立する「内の関係」と、そのような関係が成立しない「外の関係」とに分類される。この用語を用いれば、英語の連体修飾構造は「内の関係」が多いのに対し、日本語の場合には「内の関係」とともに「外の関係」も発達している (詳しくは後述する)。そのため、後者については非用も含め、学習者にとって習得が困難な可能性がある。

また日本語では連体修飾語を作る助詞としてノがあるが、寺村 (1991: 238) や西山 (1993: 65) などはその使用域の広さについて述べている。そうであるとすればこれに相当する英語の前置詞ofとどの程度対応するのかについても明らかにしておく必要がある。

Comrie (1996, 1998, 2002) によれば、日本語の連体修飾構造の制約は、統語論的な場合

* お茶の水女子大学 准教授

もあるが、語用論的な場合もあり、統語論的制約が強く働く英語などのヨーロッパ型言語とは異なり、その使用域が広いことが述べられている。

以上のことが事実なら、日本語の連体修飾節やノによる連体修飾は英語などのヨーロッパ型言語よりも広い使用域を有し、特に語用論的な制約しか働かない連体修飾の習得が難しいことが予想される。

本稿では認知言語学、中でもLangackerの「合成」や「イメージスキーマ」、「意味カテゴリー構造」などの知見を生かし、日本語の連体修飾構造全般の言語類型論的特徴を明確にする。Langackerの知見を用いるのは、第一に「合成」の考え方が、統語論的制約による連体修飾だけでなく、語用論的制約による連体修飾をも説明できること、第二に「イメージスキーマ」や「意味カテゴリー構造」は、統語論的制約による連体修飾と語用論的制約による連体修飾との関係や異同を示すことができること、による。さらに本稿は日本語の学習者に連体修飾の言語類型論的特徴をわかりやすく示す方案を模索し、日本語教育に生かすことを最終的な目的としている。最近、認知言語学的観点を生かした辞書などの教材開発が活発化しており、認知言語学のこれらの知見が日本語の連体修飾の言語類型論的特徴を明らかにするだけでなく、学習者にわかりやすく示すのにも適していると思われる（このことは認知言語学の応用可能性を検討するという意味で、他の言語理論を排除するものではない）。具体的には連体修飾節とノによる連体修飾の構造を研究対象とし、言語類型論的に対極をなす日本語と英語の場合と対照しながらその特徴を明らかにしていく。

2. 先行研究

2.1 Langackerの合成の考え方

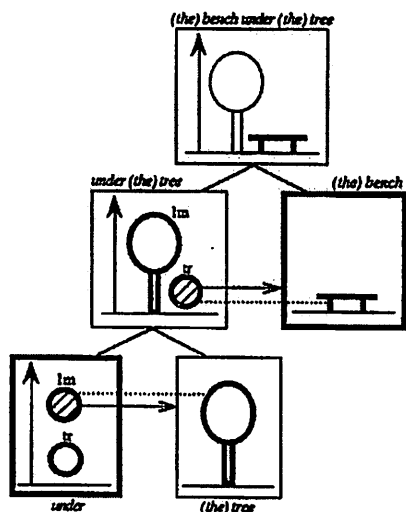


図1 the bench under the tree (Langacker2000 : 79)

図1はLangackerの合成の図式化の方式に従い、the bench under the treeという連体修飾構造が合成される構造を図式化したものである(Langacker2000: 79)。合成は最下段から上方へ向かって進んでいく。太線の枠や枠内の太線は焦点があてられて前景化されていることを示し、各段階の太枠は主要部(head)を表す。点線は対応関係、水平方向の矢印は精緻化を示し、斜線の網掛け部分は精緻化される部分(e-site)を示す。tr、lmはLangackerの用語で、trはトラジェクター(trajector: 1st figure)、lmはランドマーク(landmark: 2nd figure)を表している。最下段でまず、主要部underのlmがthe treeによって精緻化されてunder the treeとなる。次の段では、the benchが主要部であるが、これがunder the treeのスキーマ的なtrを精緻化しながら合成がなされ、最上段の構造になる。最上段を構成する2つの構成要素のうち、the benchが主要部でunder the treeが修飾語(modifier)であるため、the bench under the treeとなる。

2.2 日本語の連体修飾に関する先行研究

連体修飾に関する先行研究は数多く存在している(そのレビューについては、加藤(1999、2000、2003)が詳しい)。ここでは、それら先行研究のうち「内の関係」、「外の関係」の考え方を提示した寺村、及び生成文法、語用論、そして本稿と直接関係のある認知言語学の立場からの先行研究を取り上げることとする。

「内の関係」、「外の関係」という用語を最初に用いたのは寺村(1975-1978)である¹⁾。「内の関係」とは連体修飾節と被修飾語とが格関係で結ばれた連体修飾である。なお寺村(1976)では、「短絡」という修飾節を取り上げ、これを「内の関係」の特殊な場合としているが、これは連体修飾節と被修飾語とを単純に統語論的な格関係で結ぶことは難しくなり、後述するように語用論的推論が含まれていくことから、本稿では「語用論的推論による連体修飾節」に含める。一方「外の関係」では、「ふつうの内容補充」と「相対的補充」があるとしている。しかし「ふつうの内容補充」には語用論的推論を含まないものと、語用論的推論を含むものがあり、それらを分けないと日本語の連体修飾の特徴が見えてこない。従って本稿では前者を「内容節」とし、後者を「語用論的推論による連体修飾節」に含める。また「相対的補充」は本稿では「相対名詞修飾節」と呼ぶ。

- ・短絡：頭がよくる本、彼女が腹を痛めた娘(語用論的推論を含んでおり、本稿の「語用論的推論による連体修飾節」に相当)
- ・ふつうの内容補充：選挙に出る考え、一般の人が巻き込まれて負傷するという事件(以上は本稿の「内容節」に相当)、誰かが階段を上がってくる音、魚を焼くにおい(以上は語用論的推論を含んでおり、本稿の「語用論的推論による連体修飾節」に相当)
- ・相対的補充：深酒をした翌日、文子が座ったうしろ、たばこを買ったおつり(本稿の「相対名詞修飾節」に相当)

1)厳密にはTeramura(1970)で既に用いられている。

また名詞+ノ+名詞については、寺村（1991）が以下の4つに分けて分析している。

- ① 連用補語の連体化（N1ガ/ヲN2スル）例）芥川の自殺、伊勢物語の研究
- ② 述語名詞の連体修飾語化（N2ガN1デアル）例）漫画家の加藤さん、首都の東京
- ③ 不完全名詞に対する連体補語 例）首相官邸の前、舌の先
- ④ 所有、所属、全体・一部の関係（N1ガN2ヲ有スル/含むなど）例）私の本、次郎の伯父さん、ブッデンブロック家の人々、会社の車、彼女の眼、カメラのレンズ

奥津（1974）では、生成文法の立場から日本語の連体修飾節の研究を行い、連体修飾節には「同一名詞連体修飾」と「付加名詞連体修飾」とがあることを示した。それらは大まかに、寺村の「内の関係」、「外の関係」に近い。また西山（1993）は生成文法の立場から日本語の「NP1のNP2」と英語の「NP2 of NP1」の違いについて考察している。

語用論的観点から日本語の連体修飾節を分析したのが白川（1986:6）である。ここでは「米子に泊まった朝」、「本を売った金」などの「外の関係」の修飾関係に語用論的推論が働いているとしている。

さらに、認知言語学的観点から連体修飾を扱ったものとしては、松本（1993、1994）、Matsumoto（1997）がある。これはFillmoreのフレーム意味論の知見を取り入れ、日本語の連体修飾節は「フレーム（言語的また非言語的な文脈や世界知識から得られる手がかり）」を用いなければ解釈ができないとしている。そして日本語だけでなく、英語も含めてこれまで統語論的、構造論的に扱われることの多かった連体修飾節に対して再考を促し、同格節や「外の関係」の構文だけではなく、純粋に統語論的、構造論的に分析されるものだとされてきた関係節や「内の関係」のような構造も、実はもっと意味的、語用論的な性格を持っているのではないかと（松本1994:127）と主張している。

また英語のofについては、Langacker（2000）が用法を整理し、ofが本質的（intrinsic）な関係にのみ用いられることを示している（但し日本語に関する言及はない）。

さらにComrie（1996、1998、2002）では、世界の言語を言語類型論的に整理し、言語には関係節化の制約が統語論的なヨーロッパ型言語と、語用論的な制約ともなりうるアジア型言語とに分け、英語は前者、日本語は後者であるとしている。

このように連体修飾は、英語などヨーロッパ型言語だけを見ていると統語論的制約だけで説明できそうに思えるが、世界の言語を見渡してみると、語用論的制約も作用していること、日本語では後者が重要であることが明らかになる。本稿はこれらの見解を踏まえつつも、さらに考察を進め、第二言語として日本語を教える際には、こうした言語類型論的特徴を学習者に明示してあげる必要があること、その際には「いかにわかりやすく示すか」といった点を無視できないこと、といった点を重視すると、Langackerを始めとした認知言語学のモデルが有効であるという考えに立ち研究を行っている。

また日本語の連体修飾節とノによる連体修飾とをひとくりにし、日本語の連体修飾構造の言語類型論的特徴を整理した研究は管見の限り見当たらないことから、それについても考察を行い、日本語の連体修飾全体の特徴を明らかにし、日本語教育に役立てていく。

3. 研究の方法

まず連体修飾節構造について考察する。本稿では連体修飾節構造を、「補足語修飾節」、「語用論的推論による連体修飾節」、「内容節²⁾」、「相対名詞修飾節」の4つに分ける。また「内の関係」、「外の関係」という語は用いず、「本質的關係 (intrinsic relationship) による連体修飾節」と、「語用論的推論による連体修飾節」という用語を用いることにする。それは、以下で詳述するように、「本質的關係による連体修飾節」と「語用論的推論による連体修飾節」に分けたほうが、ofとノによる連体修飾をも含め、連体修飾の日英対照分析がしやすくなり、両語の類型論的特徴が明確になるためである。

「本質的關係による連体修飾節」は日英両語に見られ、「語用論的推論による連体修飾節」は日本語で発達している。そこでまずは日英両語に見られる「本質的關係による連体修飾節」である「補足語修飾節」と「内容節」について述べ、続いて、日本語に特徴的な「語用論的推論による連体修飾節」、最後に「内容節」と「語用論的推論による連体修飾節」が合体した「相対名詞修飾節」について述べる。

3.1 本質的關係による連体修飾節

3.1.1 補足語修飾節

本節ではまず、「魚を焼く男 (the man who grills fish)」を例に、連体修飾節のうち、補足語修飾節を説明する。これは日英両語が持っている修飾構造である。図2はLangackerの図式化したものが、「魚を焼く男 (the man who grills fish)」の連体修飾節の構造を示したものである。この連体修飾構造における「男」と「魚を焼く」とは「男が魚を焼く」と言えるように、格関係 (ここでは主格) が成立している。

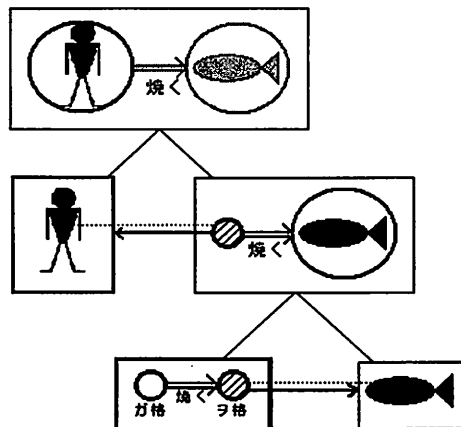


図2 魚を焼く男 (the man who grills fish)

2) 寺村(1980、1981)では「ふつうの内容補充」を「内容節」と言い換えているが、本稿で述べる「内容節」は英語でthat節や関係副詞で表されるようなもののみをさし、語用論的推論による連体修飾節は含めない。

まず、図の最下段で、「魚」が「焼く」事態のヲ格を精緻化して合成され、2段目の「魚を焼く」となる。さらに「男」が「魚を焼く」事態のガ格を精緻化して合成される。この時、2つの構成要素「男」と「魚を焼く」のうち、「男」がプロフィール (profile) されているため、合成後は「男」が前景 (図) で主要部 (head) となり、「魚を焼く」が背景 (地) でそれを修飾し、「男」についての表現が合成され、最上段のように「魚を焼く男」となる。

次に連体修飾構造を日英両語で対照してみる。図3は英語のthe man who grills fishを図式化したものであり、図4は日本語の「魚を焼く男」の構造を図式化したものである。

英語の場合には図3のように被修飾語が修飾節に前置されるので、被修飾語の格役割や意味役割を明示する必要があり、それが関係節で示されている (ここでは主格whoで動作主であることが示されている)。一方日本語の場合は被修飾語が修飾節に後置されるため、格役割や意味役割は関係代名詞を用いて明示しなくても修飾節の空所として間接的に示される。例えば図4の「魚を焼く男」では修飾節は「魚を焼く」で、主格で表されるべき動作主 (魚を焼く人) が欠如して空所となっていることから、後置される被修飾語の格役割と意味役割は、主格の関係代名詞がなくても間接的に示される。

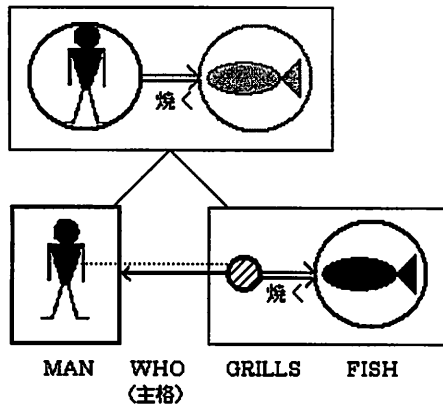


図3 the man who grills fish

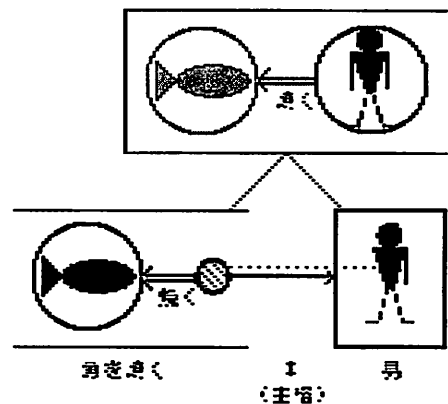


図4 魚を焼く男

3.1.2 内容節

「内容節」は被修飾名詞の内容が非常に漠然としており、それだけでは意味が不完全なため、修飾節を必要とする連体修飾構造である。修飾節と被修飾名詞とが同一物の内容と容器の関係にあるという意味で密接な関係にあり、修飾節が被修飾名詞の内容を規定するものである。英語ではthat節や関係副詞により内容が具体的に規定される³⁾。

①お酒を飲んだ (という) 事実

³⁾松本 (1994) も指摘するように、内容節に語用論的推論が全くないとは言えないが、従来の多くの先行研究で内容節の語用論的推論を考慮してこなかったように、内容節における語用論的推論は少ないと思われる。

「お酒を飲んだ (という) 事実」では、「事実」＝「お酒を飲んだ」で、図5のように両者は同一物で語用論的推論への依存度は低く、容器と内容という関係にあり、「お酒を飲んだ」が「事実」の内容を具体的に述べている (図では同格関係を実線の二重線で示している)。これは英語の場合、that節で修飾される (同格節)。被修飾名詞が引用に関係する発言や思考などに関わる名詞の場合、日本語では「という」を用いることが多い。

一方、「だれかが階段を上がってくる音」、「魚を焼くにおい」など、感覚名詞などが被修飾語になる修飾関係では語用論的推論への依存度が高くなり、「という」を用いることができなくなる。本稿ではこれらは次の「語用論的推論による連体修飾節」に含める。英語でも語用論的推論への依存度が高いという理由からthat節で表せないことが多い。

②お酒を飲んだところ

図6に示されたように、「お酒を飲んだところ」では、「ところ」と「お酒を飲んだ」とが、ある事態の場所 (空間的背景) とそこで起きた事態 (前景) を示している点で一体不可分であり、「お酒を飲んだ」が「ところ」で起きた事態を述べている。これはthat節のような同格節ほどではないが、背景と前景といった密接な関係にあり、語用論的推論への依存度は低く、英語ではwhereによる関係副詞節で修飾されるものである。



図5 お酒を飲んだ (という) 事実



図6 お酒を飲んだところ

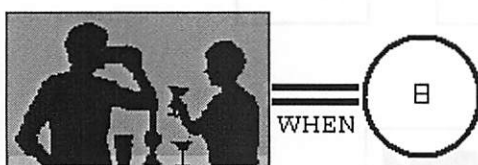


図7 お酒を飲んだ日

③お酒を飲んだ日

図7のように、「お酒を飲んだ日」では、「お酒を飲んだ」が「日」に起きた内容を具体的に述べており、「日」と「お酒を飲んだ」とが、ある事態の時 (時間的背景) とそこで起きた事態 (前景) とを示している。これもthat節のような同格節ほどではないが、背景と前景といった一体不可分の関係にあり、語用論的推論への依存度は低く、英語ではwhenによる関係副詞節で修飾されるものである。

3.2 語用論的推論による連体修飾節

語用論的推論による連体修飾節は、本質的關係による連体修飾節のように修飾節と被修飾語との間に本質的關係が成立せず、語用論的推論に依存して結びついている連体修飾構造である。コンテキストに依存し、話し手や聞き手の双方に語用論的推論が成立しなければ、修飾關係が成立しにくい⁴⁾。英語にはあまり見られないが、以下で見るように日本語にはこのような連体修飾節が非常に発達している。

①魚を焼くにおい

これは寺村 (1975-1978) で「外的關係」に含めている例である。図8では「魚を焼くにおい」が図式化されている。ここでは「におい」が「魚を焼く」により修飾され、「魚を焼くにおい」となるが、「におい」と「魚を焼く」との間には格關係や同格關係など、本質的關係が成立しない。成立するのは語用論的な推論で、それにより2つが合成される。図では破線の二重線で語用論的な推論を示している。

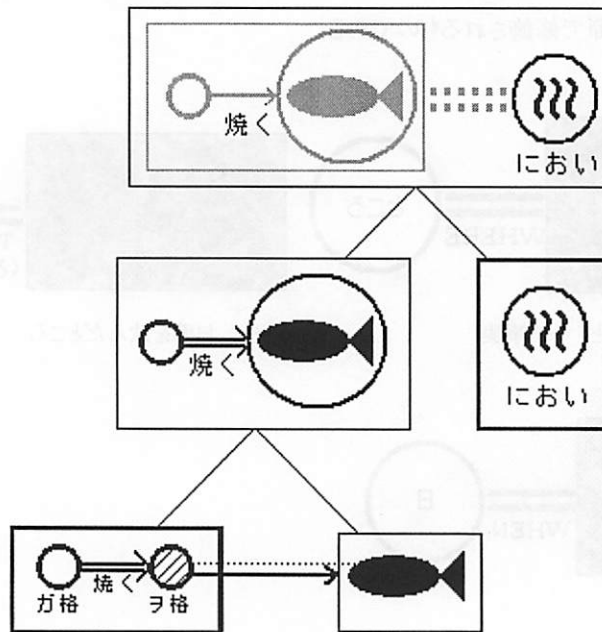


図8 魚を焼くにおい

まず、最下段で、「魚」が「焼く」事態のヲ格を精緻化して合成され、2段目の「魚を焼く」となるのは補足語修飾節と同じである。しかし「におい」は「魚を焼く」事態のどの部分をも

4) 語用論的推論については、Fillmoreのフレーム意味論を用いた松本の研究手法を用いればより詳細な説明が可能であるが、本稿では詳しい説明は省くことにする。

精緻化することができない。「魚を焼く」事態は「におい」と語用論的推論で結ばれるが、精緻化という点ではむしろ「魚を焼く」事態が「におい」を精緻化する。この際、「魚を焼く」と「におい」という2つの構成要素のうち、「におい」がprofileされているため、合成後は最上段のように「におい」が前景(図)となり、「魚を焼く」が背景(地)となって前景を修飾するので、「魚を焼くにおい」となる。

日本語の場合、補足語修飾節では、被修飾語が修飾節に後置されるので、修飾節の空所が自然と被修飾語の意味役割と格役割を指定することは既に述べた。これに対し、「魚を焼くにおい」では、修飾節に空所があって「におい」がその修飾節の空所を埋めるものではない。「におい」は「魚を焼く」事態と関連の深いものであり、語用論的に推論が成り立つ。言い換えれば語用論的推論に依存して連体修飾関係が成り立つのである。また、「魚を焼く」は「におい」の内容をより具体的に規定する働きもしている。

②頭がよくなる本

これは「この本を読めば頭がよくなるような本」という意味であり、寺村(1976)で「内の関係」の特殊な場合としているように「本で頭がよくなる」と言えなくはない。しかしこのようにやや無理をして「頭がよくなる」と「本」の間に格関係を考えるよりは、むしろ図9のように「その本を読むことにより」といった語用論的推論によって合成が行われたと考えるほうが自然であろう。ここでも「本」は修飾節「頭がよくなる」の修飾節の空所を埋めるものでなく、「頭がよくなる」事態と関連の深いもので、語用論的推論で結ばれている。同時に「頭がよくなる」は「本」の内容を具体的に規定する働きをしている。

③野菜が食べられるみそ汁

これは「そのみそ汁を飲めば(野菜が嫌いで食べられない子供でも)野菜が食べられるようになるみそ汁」という意味である。「野菜が食べられる」と「みそ汁」の間にはやはり格関係が成立しにくく、合成を導くのは図10のような語用論的推論である。ここでも「みそ汁」は修飾節「野菜が食べられる」の格関係の空所を埋めるものではない。この例では「みそ汁」は「野菜が食べられる」事態と関連の深いものであるとはいえないが、これは語用論的推論が成立しやすいとはいえない両者の関係を消費者に考えさせ、語用論的推論により結びつけ、印象づけることにより、商品をPRする効果をねらったものである。同時に、「野菜が食べられる」は「みそ汁」の内容をより具体的に規定する働きをする。

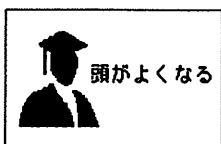


図9 頭がよくなる本

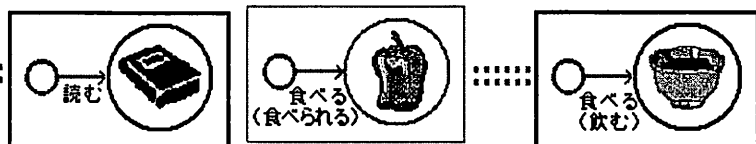


図10 野菜が食べられるみそ汁

